

残余の存在論

——虚次元の不可記述性の哲学、および記述の最小拡張の理論——

The Ontology of Residue:
A Philosophy of Structural Non-Describability and
a Theory of Minimal Descriptive Extension

村主悠真 / Yuma Muranushi

i.Institute · Tokyo, Japan · iii@iii-iii.com

ORCID: 0009-0004-3697-4197

Version 1.0 · 2026.08.17

i . F r a g m e n t a / 虚次元の断片

要旨 / Abstract

なぜ数学の拡張は完結し、存在論的記述の拡張は完結しないのか。実数体は、代数的に閉じないという事態に一本の軸——虚数単位 i を加えることで閉じた。だが実次元の記述は、虚次元 iD を承認してもなお閉じない。本稿はこの差の根拠を、拡張の再帰性——不可記述な位置を承認する記述が、そのつど新たな残余を生む構造——に求める。

本稿は、拡張虚数理論シリーズの第六論文として、二つの作業を行う。第一に、先行五論文を貫く記述様式——虚次元を直接記述せず、その存在を構造的に要請する様式——の自己制限が五段階を経て累積し、この累積が消極的なブレーキではなく、より深い領域への踏み込みを可能にする条件であったことを示す。第二に、この様式の核にある操作を残余の理論として定式化する。第五論文が原理化した最小拡張——閉じない記述は独立軸を最小限だけ要請する——は、導入される軸それ自体の記述可能性を基準に、装置的拡張と余剰的承認とに二分される。前者のみが体系を閉じさせうる（命題P1a）のに対し、後者は必然的に再帰する（命題P1b）。虚数単位 i の増設・虚時間 it の要請・虚次元 iD の承認というシリーズの三操作は、この単一の分類のもとに統合され、第五論文が後続の課題とした構造的同時性も、この理論の系として与えられる——その適用は、前件が論証された体系（実時間軸 t ）に限定される。

本稿の帰結は一つの命題に集約される——記述体系は、自らが閉じないことにおいてのみ、自らを超えて拡張されうる。そして、その拡張が完結するか再帰するかは、要請された残余それ自体が記述可能になるか否かで決まる。

Keywords: 不可記述性, 構造的余剰, 最小拡張原理, 装置的拡張, 余剰的承認, 再帰性, 構造的同時性, 虚次元, 構造的回避, 拡張虚数理論

目次 / Contents

- 01 序論——統括命題と五論文体制
- 02 不可記述性の三層
- 03 方法論的基盤——二つの与件・残余の三機能・構造的回避

04 自己制限の累積——五つの段階

05 残余の理論——最小拡張の二形態と拡張の完結条件

06 構造的同時性——残余の理論からの導出

07 哲学的余剰概念の系譜——大陸・東洋・分析・指標性

08 虚次元の五重読解と本論文の立場

09 考察と限界

10 結論

01 序論——統括命題と五論文体制

1.1 統括命題とシリーズにおける本稿の位置

本稿全体を貫く主張は、次の一つの命題に集約される。

[統括命題]

記述体系は、自らが閉じないことにおいてのみ、自らを超えて拡張されうる。そして、その拡張が完結するか再帰するかは、要請された残余それ自体が記述可能になるか否かで決まる。

前半——閉じないことが拡張の唯一の根拠であること——は、第五論文『虚時間』が原理化した最小拡張原理（村主, 2026e, 原理1）の要約であり、後半——残余が記述可能になるか否かが拡張の運命を決めること——が本稿固有の寄与（§05の命題P1）である。

本稿に先立つ五論文の配置は、表1のとおりである。

[表1 拡張虚数理論シリーズの理論マップ]

論文	領域	中核定式・概念	方法論的位置（本稿の語彙、§04-05）
I 拡張虚数理論	存在論	$Z = D + iD$	余剰的承認の原型
II 起こりの構造論	現象学	起こり	承認の実次元側記述
III 透 / Tōh（成る祈り）	実存論	$\Phi = P \times K \cdot V(Z) = \alpha D + \beta iD$	形式装置内の承認
IV 実数主義の極北	応答	記述の非閉鎖性	制御された解除
V 虚時間	時間論	$T = t + it$ ・最小拡張原理	装置的拡張・原理の明示

基礎定式のみ再掲しておく——第一論文は、対象の存在の総体Zを、記述に現れる実次元成分Dと、記述に汲み尽くされない構造的余剰としての虚次元成分iDとの重ね合わせ $Z = D + iD$ として記述する（村主, 2026a）。第一～第三論文が共有する記述様式——虚次元を直接記述せず、その存在を構造的に要請する——を、第四論文は統制のもとで一時解除して非閉鎖性を論証し（§4.2）、第五論文はその導出様式を最小拡張原理として原理化したうえで、一般化と構造的同時性の一般理論とを後続の課題として開いた。

本稿はこの二つの課題を引き受ける場である。行う作業は二つある。第一に、先行論文群を貫く記述様式そのものの主題化を、五論文体制のもとで更新する（§02-04）。第二に、その様式の核にある操作を残余の理論として定式化し（§05）、構造的同時性をその系として導出する（§06）。これにより、シリーズが個別に実演してきた三つの操作——虚数単位iの増設、虚時間itの要請、虚次元iDの承認——は、単一の理論の三事例として統合される。§07以降は、こうして確立された枠組みを、哲学史の余剰概念群に対して位置づける検証である。

1.2 本稿の射程と用語

本稿は虚次元そのものを直接記述するものではない。本稿が行うのは、虚次元の不可記述性そのものについての、実次元側からのメタ記述である。タイトル「残余の存在論」における「存在論」(ontology)の用法を明示しておく。本論文は「存在論」を、何が存在するかを主張する形而上学的論としてではなく、構造記述理論の方法論的拡張として用いる。「残余の存在論」とは「残余は存在する」と主張する論ではなく、「残余の構造的位相はいかなるものか」を本枠組みの内部から記述する論である。この点で、第四論文が提示した拡張実在論(Extended Realism)——記述が取り残す余剰を実在の側に回復する実在論的主張——とは階層を異にする。拡張実在論が主張であるのに対し、残余の存在論はその主張を書くための文法であり、両者は矛盾しない。

用語上の注記を最小限に絞る。「残余」は本稿を通じて、過剰としての余剰(residual surplus)ではなく、構造的位相としての余剰(structural residue)の意味で用いる(詳細は§8.7)。「拡張」(extension)とは、記述体系に独立な記述軸を加える操作を指し、第五論文の定義2(記述の閉鎖)・規範1(軸の負荷根拠)・原理1(最小拡張原理)をそのまま所与として継承する——本稿はこれらを再定義せず、シリーズ外の読者のために初出箇所で行再掲する。「対象局所的」「積極的構造」の語義は、それぞれ§7.3・§3.2の初出箇所を示す。

1.3 本稿の構成

本稿の核心は一点にある——最小拡張を装置的拡張と余剰的承認の二形態に分け、その差から完結する拡張と再帰する拡張の分岐を導くこと(§5.2–5.3)である。§02–04はその準備、§06は系の導出、§07–08は基底事例の座標検証にあたる。

02 不可記述性の三層

「不可記述」という語は、しばしば複数の異なる事態を一括して指す。本稿はこれを三層に分け、本論文における虚次元がいずれの層に属するかを明示する。

2.1 認識不可能性(epistemic unknowability)

第一の層は、認識主体の側の限界に起因する不可記述性である。ある対象が現在の認識能力では捉えられないが、将来の発展によっては捉えられうる——この層は原理的限界ではなく、現状の認識的不足を意味する。認識能力が拡張すれば記述可能となるため、潜在的には実次元の領域内に位置する。本論文の虚次元はこの層には属さない。第一論文§1.2が示すとおり、「『まだ知らない』と言える時点で、その事柄はすでに『知られうるもの』として意味の領域に入っている」。認識不可能性は実次元側の問題である。

2.2 言語化不可能性(linguistic ineffability)

第二の層は、言語の表現能力の限界に起因する不可記述性である。Wittgenstein『論理哲学論考』(1922)の「語りえぬものについては沈黙しなければならない」(7)に代表される伝統が、この層を主題化してきた。神秘体験、美的感覚、絶対的他者性などがここに位置づけられる。本論文の虚次元はこの層にも属さない。言語化不可能性は表現の媒体としての言語の限界の問題だが、本論文の虚次元は対象の構造的側面そのものの位置についての規定である(詳細は§7.2)。ただし、虚次元への言及そのものが意味形成の運動を要求し、その瞬間に虚次元は実次元に位置することになる——この自己言及的構造はWittgensteinの「示すことしかできないもの」(『論考』6.522)と類比的だが、類比は示す／語るという運動の水準にとどまり、虚次元の所在はあくまで次節の第三層にある。

2.3 構造記述不可能性(structural non-describability)

第三の層は、対象の構造そのものに内在する不可記述性である。これは認識主体の限界でも言語の限界でもなく、対象の構造的側面が、記述という操作にとっては外部に位置することを意味する。本論文の虚次元はここに属する。

第一論文の三項定義——非意味・非顕在・非定義——は、虚次元が実次元の閉鎖不可能性として構造的に要請されることを示す。虚次元は、対象自身の構造内部に折り畳まれた、記述という操作の構造的余剰である。構造記述不可能性は、認識能力の拡張や言語の精緻化によっては解消されえない。それは対象自身の構造的特性であり、認識や言語の側の問題ではない。この第三層の非閉鎖性が認識の不足ではなく実在の構造に属する点については§3.1で改めて述べる。

この第三層が、存在の構造においてだけでなく時間の構造においても現出することは、第五論文が独立に論証した。現在における位相の共存は、実時間軸 t の細分化によっても区間への置き換えによっても回収されない（村主, 2026e, §05）——これは認識能力の不足でも言語の限界でもなく、 t という記述軸の構造そのものが位相の共存を内に含みえないという、第三層の不可記述性の時間的現出である。第三層は存在論の一領域に局在する特殊事情ではなく、記述体系一般に横断的に現れる——この横断性が、§05の定式化の動機となる。

03 方法論的基盤——二つの与件・残余の三機能・構造的回避

本節は、本論文の方法論的基盤を整理する——(a)本稿が所与として受け取る二つの与件、(b)なぜ残余が必要か、(c)構造的回避はいかなる操作か。

3.1 二つの与件——非閉鎖性の論証と最小拡張の原理化

記述が閉じないという事態——記述は意味として立ち上がった結果しか捉えられず、立ち上がりの手前を必ず取り残すこと——の論証は、本稿ではなく応答論文『実数主義の極北』（村主, 2026d）が担う。同論文は、記述の事後性と後退論証——立ち上がり記述に収めようとする操作は、収めた先からまた新たな手前を産む、という論証——によって、取り残される余剰が認識の不足ではなく記述という営みそのものの構造に属することを、実数主義の内的論理から正面から論証した。本シリーズはこの一点で役割を分担している——非閉鎖性の論証は2026dが、その非閉鎖性を抱えたまま記述を続ける方法論は本稿が担う。本稿は非閉鎖性を証明し直さず、所与として受け取る。

閉じた体系の不可能性は、Gödelの不完全性定理から、解釈学的・構造主義的・現象学的な諸伝統に至るまで、複数の文脈で構造的類比として論じられてきた。本稿が前提として受け取るのは、対象 X の実次元成分がそれ自体では閉じた記述を構成せず（第一論文の公理1 非閉鎖性）、この非閉鎖性が対象の偶発的屬性ではなく構成的特性である（第一論文§4.1）という一点である。虚次元と実次元は $Z(X)$ の中で直交する成分として共存し（公理3 直交性）、この直交性は、実次元の量的拡張によって虚次元に到達することが原理的に不可能であることを意味する。

さらに第五論文は、この非閉鎖への応答の様式を最小拡張原理として原理化した——閉じない記述は、それを補完する独立軸を、非閉鎖の解消に必要な最小限だけ要請する（村主, 2026e, 原理1）。したがって本稿の与件は二つである——非閉鎖性の論証（2026d）と、最小拡張の原理化（2026e）。本稿の仕事は、この二つの与件の合流点で、非閉鎖な記述を抱えたまま記述を続けるとはいかなる操作かを、単一の枠組みとして示すことにある。以下の二つの論点——残余の三機能（§3.2）と構造的回避（§3.3）——は、その準備である。

3.2 残余の三機能——境界の三関係からの導出

§3.1が非閉鎖性を所与として受け取ったのに対し、ここでは逆方向の問いに応答する——なぜ残余は積極的に「必要」なのか。そしてなぜその必要性は三つの機能として現れ、二つでも四つでもないのか。

本論文の枠組みにおいて、残余としての虚次元は、実次元の閉鎖境界そのものの位置を占める。したがって残余の機能は、境界が体系に対して持つ構造的関係から導かれる。本稿では、境界の構造的相関項を「境界自身・境界が分かち領域・境界が画する全体」の三つとして整理する——境界は、(a)自己自身に対しては、その位置を動かさうるものとして、(b)それが分かち二領域に対しては、内と外を区別するものとして、(c)それが画する全体に対しては、全体の内にその限界として折り返されうるものとして関係する。残余の三機能は、この整理に一つ一つに対応する。

第一に、境界の動性から分節（articulation）の機能が導かれる。境界が動きうるからこそ、実次元の内部は組み替えられ、認知の進展・理論の発展・対象の再分節が可能になる——これは第一論文の公理5（境界の動性）が要請するものである。完全に閉じた体系は、境界が動くための構造的余地を持たない。なおここで「閉じた体系」とは「内部状態の動的変化を持たない体系」ではなく、「内部と外部の区別そのものが組み替え不可能な体系」を意味する。残余としての虚次元があることによって、はじめて実次元の境界は動的に変動しうる。

第二に、境界の区別作用から同一性（identity）の機能が導かれる。本論文は差異論的同一性観（Saussure・Derrida系）を採用する——「これはXである」と言うためには、「Xでないもの」が境界の外側に位置しなければならない。境界が内と外を分かちあうからこそ、実次元は「虚次元ではないもの」として同一性を持つ。完全に閉じた体系は外部を持たない以上、体系全体の同一性は規定されえない。

第三に、境界の再帰可能性から自己反省（self-reflection）の機能が導かれる。境界は、それが画する全体の内に、その全体自身の限界として折り返されうる。この折り返しによって、実次元の記述は「自身が完結していない」という事実を自身の内部に表示できる。本論文が要請するのは、体系内部の擬似的なメタ視点ではなく、体系の非閉鎖成分——境界としての虚次元——によって保証される構造的メタ視点である。

この整理によって、三機能は著者の任意の列挙ではなく、境界の三つの相関項から系統的に導かれる。相関項を二つに絞れば、いずれか一つの機能が欠落する。他方、四つ目の相関項は本稿の境界モデルからは立たない——境界が関係しうるのは、自己自身か、それが分かちあう部分か、それが画する全体かのいずれかであり、この三分は部分全体論的に尽きているからである。三機能の「三」は、列挙の偶然でも趣味の節約でもなく、本稿が採用する境界モデルにおいて独立に要請される相関項の、最小にして網羅的な集合である。

ここで同一性機能が言う「外部」は、実次元成分Dに対する外部であって、対象の総体 $Z = D + iD$ に対する外部ではない。虚次元はDに対しては外部に位置しながら、Zに対しては内在する（公理2 内在性）。同一性機能が要請する外部性と、本論文が一貫して強調する対象内在性とは、この二層の区別において両立する¹。

3.3 構造的回避——否定神学と沈黙の哲学からの区別

本論文が採用してきた「虚次元を直接記述しない」という操作は、否定神学とも沈黙の哲学とも異なる。三者を分けるのは応用領域の違いではなく、不可記述性をどこに帰属させるかである。否定神学（Dionysius、Eckhart、Cusanus等）は、それを対象の側——直接の述定を受けつけない超越の対象——に帰属させ、否定を積み重ねてそこへ接近する。沈黙の哲学（Wittgenstein、禅的伝統等）は、言語ないし表象可能性の限界に帰属させ、限界の外については言明を行わない。本論文の構造的回避は、そのいずれでもない——不可記述性を、記述体系に対する対象内在的な構造的な位置に帰属させる（§1.2、§8.7）。

したがって構造的回避は、超越的实在を肯定も否定もしない。行うのは、対象についての言明を構造記述（実次元側からのメタ記述）として遂行し、その位置を構造的余剰として確定することである。否定神学もまた言明によって進む以上、両者の差は言明の有無ではなく、その向かう先にある——超越的对象へか、記述自身の非閉鎖性の条件へか。構造的回避もまた残余を残す（§9.1）が、その残余は隠された肯定的存在ではなく、記述という操作の構造的余剰そのものである。この帰属先の区別は§05で、装置的拡張と余剰的承認の区別として形式化される。

04 自己制限の累積——五つの段階

先行五論文の自己制限は、段階ごとに姿を変えながら累積してきた。表2に五段階を掲げ、以下では各段階の詳細を各論文に譲って、累積の形だけを辿る。

〔表2 自己制限の五段階〕

段階	形態	実装
I	宣言	「本稿は虚次元そのものを直接記述するものではない」（第一論文§1.5）
II	方法論	虚次元由来という規定を「捕捉以後の実次元側からの事後的な記述」に限定（第二論文§1.2, Definition 1）
III	形式装置	$\Phi = P \times K \cdot V(Z) = \alpha D + \beta iD$ を実次元側構造記述として形式内部に組込（第三論文§1.4, §6.1）
IV	制御された解除	対立項の主題化のみを解除し、「虚次元側から論じない」層を保持（第四論文§1.1）
V	原理化	最小拡張原理——「必要以上に語らない」の理論構築水準での形式化（第五論文 原理1）

4.1 五段階——宣言から原理へ

第一～第三段階の進行は、一言で言えば制限の所在の内面化である——論述の外側に置かれた宣言（I）から、論述全体を統べる方法論（II）へ、そして形式装置の内部（III）へ。到達点を示すのは第三段階である。観測者関数 $V(Z) = \alpha D + \beta iD$ は βiD という項を形式の内部に保持しながら、その項への直接的アクセスを主張せず、感受性係数 β を通じてのみ虚次元への構造的接続を記述する。形式に組み込まれた構造的回避の実装である。

第四段階では、制限は運用の対象になる。第四論文は冒頭で宣言する——先行論文は「対立項そのものを正面から論じることを避けてきた。本稿はこの自己制限を一時的に解除し、対立項を主題化する。ただし、本稿の批判的論証は対立項の内的論理のみに依拠し、虚次元側からの議論には頼らない」（村主, 2026d, §1.1）。解除されるのは「対立項を主題化しない」という層のみであり、「虚次元側から論じない」という層は解除のあいだも維持される。自己制限は一枚岩の禁則ではなく、層ごとに解除と保持を設計しうる運用可能な体系であることが、ここで実演された。第三段階までが制限の精緻化であったとすれば、第四段階は制限の運用である。

そして第五論文において、自己制限は個別の宣言・方法・装置であることをやめ、最小拡張原理という理論構築の生成原理になった。「導入は、非閉鎖を解消するのに必要な最小限の軸数にとどめられる」（村主, 2026e, 原理1）——「必要以上に語らない」という構造的回避の精神が、記述軸の導入という理論構築一般の水準で形式化されたのである。この原理化が表記の細部にまで貫かれていることは、同論文が複素的表記 $T = t + it$ を採用しながら、虚数単位の代数的性質 ($i^2 = -1$) を「いかなる論証にも用いていない」と明示した一点に、検証可能な形で現れている（同, §04）。

宣言（I）、方法論（II）、形式装置（III）、制御された解除（IV）、原理化（V）——自己制限は五段階を経て、「虚次元を直接記述しない」という個別の禁欲から、「記述は要請されたものだけを、要請された水準で書く」という一般規範へ成長した。

4.2 累積の意味——踏み込みの条件

この五段階から一つの洞察が引き出される——自己制限は、消極的なブレーキではなく、より深い領域への踏み込みを可能にする条件として機能してきた。踏み込む領域が形而上学的主張への滑落に近づくほど——存在論から現象学へ、実存論へ、対立項の懐へ、そして時間へ——制限はより深い水準——宣言から方法論へ、形式装置へ、運用へ、原理へ——に組み込まれてきた。

五段階を通じて、制限の深化と踏み込みの深化は正確に並行する。この並行は偶然ではない——§05で示すとおり、自己制限とは残余の理論の実践的な名であり、踏み込みの深さは、残余をどれだけ精密に承認できるかに対応するからである。自己制限は「踏み込めない領域を画定する」のではなく、「踏み込むために必要な構造を提供する」。

本稿が第六の層として加えるのは、累積のさらなる精緻化ではない。累積の全体を生成してきた単一の文法——残余の理論——の取り出しである。本稿自身もこの自己制限を継承し、虚次元を直接記述せず、その不可記述性の実次元側からのメタ記述として進む。

05 残余の理論——最小拡張の二形態と拡張の完結条件

5.1 残余の定義

第五論文の定義2（記述の閉鎖——記述体系 S が、対象のもつ構造を、 S に還元されない新たな独立軸の導入なしに再構成できるとき、 S はその対象に対して閉じている）と原理1（最小拡張原理）を所与として、本稿は残余を次のように定義する。

[定義A（残余）]

記述体系 S が対象に対して閉じていないとき、最小拡張原理により、 S に還元されない独立な記述軸が要請される。残余とは、この要請された軸が指し示す構造の、 S の側から見た位置である。すなわち残余とは、 S の内部には現れないが、 S の非閉鎖として S の内部に痕跡を残す、当の構造的位置を指す。

この定義は三つの帰結を直ちに持つ。第一に、残余は S に相対的である——「残余である」とは絶対的な規定ではなく、特定の記述体系に対する位置である（§1.2の対象局所性の一般化）。第二に、残余は欠如ではない——それは S の非閉鎖を構造的に保証する側であり、§3.2の三機能を境界として担う（積極的構造の一般化）。第三に、残余の承認——残余をその位置において確定する操作——は、 S の内部からの操作であって、残余に到達する操作ではない。

シリーズがこれまで扱ってきた三つの事例は、この定義の三つの充足である。実数体 R の代数的非閉鎖に対する虚数単位 i 。実時間軸 t の位相共存に対する虚時間 it 。実次元 D の記述的非閉鎖に対する虚次元 iD 。三者は同一の定義を満たす——しかし、次項で示すとおり、同一の位置づけを持つのではない²。

5.2 最小拡張の二形態——装置的拡張と余剰的承認

三事例を並べたとき、見かけの同型性の内側に一つの断層が走っていることに気づく。虚数単位 i と虚時間 it は、導入されたのちに記述軸として機能する——複素数は虚数軸上に位置を持ち、位相は it 軸上に位置づけられる。ところが虚次元 iD は、第一論文の三項定義（非意味・非顕在・非定義；村主, 2026a, §1.2）により、いかなる形式的記述の内側にも現れない——この点の展開は村主 (2026d, §3.1) にある。導入された軸そのものの記述可能性において、三事例は二群に分かれる。本稿はこの二群を次のように名づける。

[定義B（最小拡張の二形態）]

最小拡張という単一の操作類は、導入される軸の記述可能性を基準として、二つの形態に分かれる。ただし両形態は対等な並列ではない——本稿の枠組みにおいて、余剰的承認が基底形態とみなされ、装置的拡張はその完結可能な派生形態として位置づけられる（この非対等性の根拠と、その主張の水準の限定は§5.4末尾で与える）。

(a) 装置的拡張 (instrumental extension) ——導入される軸そのものが、拡張後の体系において記述可能な対象となる拡張。虚数単位 i の増設、虚時間 it の要請がこれに当たる。導入された軸のうえに、対象の構造が位置づけられ、記述される。

(b) 余剰的承認 (residual acknowledgement) ——導入される軸そのものが、拡張後の体系においてもなお構造記述不可能性 (§2.3の第三層) にとどまる拡張。虚次元 iD の承認がこれに当たる。ここで確定されるのは軸上の位置ではなく、軸という位置そのもの——記述がそのつど取り逃す立ち上がりの、構造的な席——である。

両形態の差は、拡張の前後で何が書けるようになったかを比べれば見える。実数体において書けなかったのは $x^2 = -1$ の解である。虚数単位 i を増設したのち、この解は「 i 」と書ける——増設された軸は、対象を載せる台になった。書けなかったものが書けるようになった以上、増設を要請した当の欠落は埋まっている。虚時間 it も同様であり、位相は it 軸上の位置として指し示される。一方、実次元において書けないのは、意味として立ち上がる手前である。虚次元 iD を承認したのち、この手前は依然として書けない——承認によって確定するのは、そこに構造的な席があるという一事であって、席を占めるものの記述ではない。 iD 軸は台にならず、記述の条件の側にとどまる。

区別の基準は、したがって一問に尽きる——要請された軸は、拡張後の体系において記述の道具となったか、それとも記述の条件にとどまったか。装置的拡張では、拡張を要請した欠落そのものが埋まる。余剰的承認では埋まらない——埋めないことが承認の定義である。この差が拡張の行方を分けることは、§5.3で命題として立てる（物理学の複素数と虚次元 iD の位置づけを「正反対」とした第四論文の区別の一般化である——村主, 2026d, §3.1）。以下、本稿が「残余が記述可能になるか否か」と言うときは、つねにこの一問を指し、統括命題の後半もこの意味に固定される。

なぜ形態は二つで尽くされるのか、という問いに先回りしておく。区別の基準——拡張軸それ自体が記述対象となるか否か——は排中律に従う二値の問いであり、第三の値を持たない。想定しうる中間例——部分的にのみ記述可能な軸——は、第三の形態ではなく二形態の混成である。軸の記述可能な部分は装置として機能し、記述不可能な部分は承認された残余としてとどまる——そして後者が残るかぎり、命題 P1b (§5.3) はその部分に働く。ゆえに二分は、事例の単純さの仮定ではなく、基準の二値性の帰結である。

この区別は、§3.3で確認した帰属先の区別に正確に対応する。装置的拡張は、軸の実在について中立でありうる——第五論文が it を「非実在の記述軸」として導入し、その実在を主張しなかったのは、装置的拡張の正しい自己理解である。余剰的承認もまた超越的実在を肯定しない——しかしそれは中立によってではなく、承認される位置が定義上いかなる記述内容でもないことによってである。

5.3 拡張の完結条件——なぜ数学は閉じ、記述は閉じないのか

二形態の区別は、シリーズが暗黙に抱えてきた一つの非対称を、命題の形で明示することを可能にする。数学の最小拡張は完結する——実数体に i を加えた複素数体は代数的閉体であり、いかなる代数方程式ももはや体の外部を要請しない。拡張は一度で終わる。ところが存在論的記述の最小拡張は完結しない——虚次元 iD を承認する記述は、それ自身が実次元側からのメタ記述であり、そのメタ記述がまた新たな立ち上がりの手前を取り残す（第一論文の公理 4 記述の非最終性、および 2026d の後退論証）。第五論文が三層構造について「存在論的な同型性を主張するのではない」と留保したとき、留保されていた内実は、まさにこの断層である。

本稿はこれを次の命題として立てる³。

〔命題 P1a（完結の必要条件）〕

最小拡張が体系を対象に対して閉じさせるならば、その拡張は装置的拡張である。対偶として——装置的拡張でない拡張、すなわち余剰的承認およびそれを含む混成 (§5.2) は、体系を閉じさせない。なお逆方向——装置的拡張であれば必ず閉じる——は主張されない。装置的拡張は、非閉鎖の原因が導入軸のうえで記述可能な位置を得ることによって完結を可能にするが、保証はしない。完結が現に成立した実例が、複素数体の代数的閉性である。

〔命題 P1b（再帰の必然）〕

導入される軸それ自体が構造記述不可能性にとどまる場合——すなわち余剰的承認の場合——拡張は必然的に再帰する。承認の記述がまた新たな残余を生み、この再帰に終端はない。

以下、両者の連言を総称して命題 P1（拡張の完結条件）と呼ぶ。P1b は P1a の対偶を強化する関係にある——余剰的承認は、たんに閉じさせない（P1a 対偶）だけでなく、積極的に再帰する（P1b）。

ここで「再帰」の語を一度だけ確定しておく。本稿でいう再帰とは、計算科学における自己呼び出しでも、数学における帰納的定義でもない。それは、承認という操作がその成果物——承認の記述——に対して再び適用可能となり、適用のたびに新たな残余を産む、という操作の反復構造を指す。無限後退（regress）がしばしば論証上の欠陥を含意するのに対し、本稿の再帰は欠陥の告発ではなく、理論が自身について予言する中立的な構造記述である（英訳語にはregressとの混同を避けrecursivityを当てる）。

論証は、二形態の定義と、第四論文が確立した後退論証との合成から従う。装置的拡張において、非閉鎖の原因であった構造（例：負数の平方根）は、導入された軸のうえで記述可能な位置を得る——原因が解消されるがゆえに、拡張は完結しうる（P1a）。余剩的承認において、非閉鎖の原因は「立ち上がりの手前が記述に含まれない」という記述の構造そのものにある。承認はこの原因を解消しない——解消しないことこそ承認の定義である。承認を書き留めた瞬間、書き留められたものは一つの立ち上がった結果であり、その手前がさらに退く（後退論証）。ゆえに再帰する（P1b）。ここで明示しておくべきは、P1bの依存構造である——P1bは定義B単独の帰結ではなく、余剩的承認の定義と、第四論文が確立した後退論証（村主, 2026d, §04）との合成から従う。定義Bが与えるのは「承認は原因を解消しない」までであり、「解消されない原因が承認のたびに新たな残余を産む」という再帰の駆動部は、後退論証が担う。

この命題から二つの系が従う。

[系1]

「閉じた体系の不可能性」は、命題P1bの系である——実次元の記述が要請する拡張は余剩的承認であるから、いかなる拡張によっても体系は閉じない。閉じた体系の不可能性は、独立の公理ではなく、要請された残余が記述可能になりえないこと（第三層への所在）からの帰結として位置を得る。

[系2]

本稿自身のメタレベルの限界（§9.1）もまた、命題P1bの自己適用である。本稿は残余の理論を記述したが、この記述もまた一つの承認であり、ゆえに再帰の一段をなす。理論が自らの不完全性を命題として含み、その命題が自らに適用される——この自己適用が破綻しないことは、余剩的承認という操作が理論の内部で首尾一貫していることを示す。ただしそれは理論の外から見た妥当性の証拠ではない——ここで主張されるのは整合性であって、正しさではない。

5.4 虚時間itと虚次元iDの記述可能性——シリーズ内在的な緊張の解消

二形態の区別は、シリーズが第五論文以降に抱えることになった一つの緊張を解消する。第五論文の虚時間itは記述軸として機能する——位相はitのうえに位置づけられ、記述される。一方、第四論文の虚次元iDは、いかなる形式的記述の内側にも現れない。両者は同じ「虚」を冠しながら、記述可能性が正反対に見える。虚時間は虚次元の時間版ではないのか——だとすれば、なぜ一方は記述でき、他方はできないのか。

解消は二段からなる。第一に、虚時間itは装置的拡張であり、虚次元iDは余剩的承認である——両者は定義Bの異なる形態に属し、両者の差は混乱ではなく分類である。「虚」の接頭辞が共有するのは「実成分の軸に直交する独立軸」という形式的な位置のみであり、記述可能性は形態ごとに異なっていよい。

第二に——こちらが実質的な解消だが——it軸上への位相の位置づけは、第二論文 Definition 1 が確立した操作（虚次元由来という規定は捕捉以後の実次元側からの事後的記述である）の時間版である。すなわちit軸はそれ自体としては実次元側の記述装置であり、その装置が要請される根拠——位相がそのつど立ち上がってくる当の働き——が虚次元iD型の余剩である。装置は記述可能であり、装置を要請した立ち上がりは記述不可能である。第五論文が「itの実在を主張しない」と留保したのは、この二層の正しい運用であり、本項はその運用に二形態の区別という名を与えたにすぎない。

この虚時間 it の分析から、定義Bが予告した非対等性の根拠が一般化される——いかなる装置的拡張も、それに先立って体系が閉じないという事態がなければ要請されない。装置的拡張は非閉鎖への応答であって、非閉鎖の原因ではない。この順序において、余剰の承認は基底であり、装置的拡張はその完結可能な派生形態として位置づけられる。虚数単位 i の増設ですら、数の体系が閉じないという事態への応答であった。

ただし、この位置づけの水準を明示しておく。ここで主張されているのは、定義2（記述の閉鎖）の水準における同型性——いずれの拡張も、独立な記述軸なしには対象の構造を再構成できないという同一の事態への応答である——に限られる。実数体の代数的非閉鎖を、記述が立ち上がりを取り逃すという第三層の非閉鎖 (§2.3) に還元することは、本稿の主張ではない。その還元は、§6.3と同じ規律——前件が論証されていない体系に、論証済みの体系の構造を帰属させない——が排するところである。基底／派生の順位は、この限定された水準における本枠組み内部の位置づけであって、数学的非閉鎖の存在論的解釈ではない。

06 構造的同時性——残余の理論からの導出

第五論文は結論部で、現在の位相共存を「構造的同時性の、隔たりがごく小さい特殊な場合」とし、その一般理論を後続の課題とした。本節はこの課題を、独立の理論としてではなく、§05の枠組みの系として引き受ける。

6.1 定義

[定義C（構造的同時性）]

記述体系 S が順序構造（前後・大小・系列）を持つとき、 S の順序において隔たった二つ以上の位置にある構造が、 S に直交する記述軸において一つの構造的場に共属すること——これを構造的同時性と呼ぶ。共属は S の順序関係に還元されず（そうであれば直交軸は要請されない）、 S の側からは、 S の記述が回収しえない共存として——すなわち残余の痕跡として——現れる。なお「構造的場」とは、 S の順序関係では表せない共属関係を保持する記述上の位置を指し、いかなる実在的領域も含意しない。

第五論文が論証した現在の厚みは、この定義において $S = t$ （実時間軸）、隔たりが微小の場合である。定義Cの射程はこれより広い——隔たりの大きさにおいて、そして記述体系の種類において。

6.2 t 軸上で遠く隔たった位相の共属

隔たりが大きい場合の構造的同時性の例を一つ挙げる。数十年前の出来事が、想起として—— t 軸上の過去位置への参照として——ではなく、いま立ち上がりつつあるものの内的分節として現在に共属する場合である。参照と共属を分ける基準は第五論文の論証がそのまま与える——参照は二つの t 位置のあいだの関係であり、共属は一つの現在の内部における関係であって、両者は範疇を異にする（村主, 2026e, §05）。隔たりの大小はこの範疇区別に何も加えない。実際、第五論文の論証のどの段階——細分化が厚みを生まないこと、前後関係が共属に変換されないこと、保持の畳み込みが指標的視点を消去できないこと——も、隔たりの微小性を前提していない。ゆえにこの拡張に新たな論証は要らない——既存の論証の適用範囲の確認で足りる。

6.3 適用範囲と射程の限定

定義Cは S を t に限定しない。順序構造を持つ任意の記述体系——論理的先行性の系列、因果の系列、テキストの線状性、数の系列——について、その順序に還元されない共属が確認されるなら、同じ形式が働く。ただし本稿は、各体系における共属の実在を主張しない。本稿が示すのは条件文である——もし S の順序が回収しえない共属があるなら、そのとき最小拡張原理により直交軸が要請され、共属はその軸上の構造的同時性として位置づけられる。前件の成立は体系ごとの個別の論証事項であり、第五論文は $S = t$ についてそれを果たした。

本稿が主張の水準で保持するのは三点のみである——(a) $S = t$ における構造的同時性（第五論文が論証済み）、(b) その論証が隔たりの大きさに依存しないこと (§6.2)、(c) 条件文としての形式（定義C）。 t 以外の体系への言及は適用可能性の指摘にとどまる。この限定は消極的な留保ではなく規範1の適用である——前件が論証されていない体系に共属の实在を帰属させることは、いかなる構造によっても要請されていない構造の導入にほかならない。

6.4 起こり概念との構造的統合

第五論文が第二の課題とした「第二論文の起こり概念との構造的統合」も、同じ位置づけで果たされる。起こりとは、虚次元由来の微細振動が認知空間上で捕捉される事態であった（村主, 2026b）。構造的同時性の語彙で言えば——起こりの捕捉とは、まだ t 軸上の位置を持たないもの（立ち上がりつつあるもの）が現在の層に食い込む、虚時間 it 方向の共属の、実次元側からの事後的記述である。起こりが「具現化の手前」として捕捉されうるのは、現在が it 方向の層構造を持つからにほかならない——幅なき一点としての現在には、手前のものが食い込む場所がない。逆に、 it 軸が要請される根拠であった位相の立ち上がりは、第二論文の語彙では起こりの発生層である。両論文は同一の構造を、時間記述の側（V）と現象学的捕捉の側（II）から記述していたのであり、統合とは新たな理論の構築ではなく、この同一性の確認である。

07 哲学的余剰概念の系譜——大陸・東洋・分析・指標性

本節以降が測るのは本理論の抽象形式ではなく、その基底事例——虚次元——である。装置的拡張が余剰的承認の派生形態である以上 (§5.4)、基底事例を哲学史の座標上に確定することが、本枠組みの検証の実質をなす。以下では大陸・東洋・分析・指標性の四系譜から、余剰概念を虚次元との構造的類比として整理する。各思想家の解釈の確定は専門研究に委ね、本枠組みから見た構造的差異の整理に専念する。

7.1 KantのDing an sich

KantのDing an sich（物自体）は、直接認識できないが認識を成立させる構造を要請する点で虚次元と同型である。決定的な差は所在にある——Ding an sichが認識主体の外部に位置するのに対し、本論文の虚次元は対象自身に内在する（公理2 内在性）。虚次元は不可認識性を共有し、主体に対する外在性を共有しない（詳細は§8.6）。

7.2 Wittgensteinの「語りえぬもの」

Wittgenstein『論理哲学論考』（1922）は、語りうるもの（言語の限界内）と語りえぬもの（限界の外）を区別し、後者については沈黙しなければならないと結論する。倫理、美、宗教的なものがここに属する。「語りえぬもの」と虚次元は直接的言語化を回避する点で同型だが、帰属先が異なる (§3.3)——前者は言語の限界に、後者は対象の構造そのものに帰属する。Wittgensteinの枠組みでは対象は語りうる側に位置し、語りえぬものはその外側に置かれる。虚次元は外側ではなく、対象の構造内部の余剰である。

7.3 HeideggerのEreignis / Lichtung

Heidegger後期のEreignis（出来事性）とLichtung（開かれ）は、存在者（Seiende）が存在者として現れる条件としての存在（Sein）の構造を扱う。Ereignis / Lichtungと虚次元は「存在者（実次元）が現れる条件としての構造を、その存在者の側からは直接捉えられないもの」として位置づける点で並行する。しかしHeideggerのEreignisは、しばしば存在論的・宇宙論的な原初性を含意する。一方、本稿の虚次元は特定の対象Xに対する構造的余剰として対象局所的に規定され、宇宙的原理としては扱われない——本論文の枠組みにおいて宇宙とは、すでに記述対象として分節された総体、すなわち実次元の側に属するものだからである。

7.4 LacanのRéel

LacanのRéel（現実界）は、象徴界からは捉えられない不可能なものであり、虚次元とともに「意味の体系（実次元）の閉鎖不可能性を保証する余剰」として並行する。ただしRéelが精神分析的主体論の枠組みで欲望・トラウマと結びつくのに対し、本論文の虚次元は対象の一般領域での構造記述であり、主体論的含意を伴わない (§8.5)。

7.5 Derridaのdifférance / trace

Derridaのdifférance（1968年講演、1972年書籍所収）は、「いま・この現れ」が常に他との差異と遅延によってしか成り立たないことを示す操作概念であり、本稿が扱う諸概念の中で虚次元と最も近い。ただし両者は論理のカテゴリーを異にする——différanceは運動を指す操作概念であり、虚次元は構造的な位置である (§8.4)。

7.6 Deleuzeのvirtuel

Deleuzeのvirtuel（『差異と反復』1968）は、actuelな存在の潜在的・生成的基盤として位置づけられ、actuelがvirtuelを消尽せず成立する点で虚次元と並行する。ただしvirtuelが生成の力動的・強度的構造であるのに対し、本稿は虚次元を生成運動ではなく構造的な位置として規定する。これは動性の否定ではない——境界の動性（公理5）、起りの立ち上がり（第二論文）、 $\Phi = P \times K$ の動的維持（第三論文）といった実次元側作用の動性は積極的に主題化されており、構造的な位置として規定されるのは虚次元それ自体だけである。

7.7 大陸系の周辺系譜

これら六概念の周辺には、Blanchotのdehorsをはじめ虚次元と位相的に重なる概念群がある。とりわけAgambenのresteは本論文の「残余」概念と語において直接響き合うが、その問題系はメシア論・政治哲学的であり、応用領域を異にする。

7.8 東洋思想における余剰の系譜

大陸系と並行して、東洋思想にも「直接記述できないが構造的に要請されるもの」の長い系譜が存在する。以下の諸概念は、いずれも本論文の虚次元と「直接的肯定言明の回避」「既存範疇への還元拒否」「構造的成立条件としての要請」において並行する。他方で本論文の虚次元は、これら東洋的余剰の多くが帯びる救済論的・実践論的含意を伴わない純然たる構造記述であり、かつ対象局所的な余剰である点で、系譜全体から一貫して区別される。以下ではこの共通の差異を前提に、各概念に固有の論点のみを述べる。

龍樹（Nāgārjuna）の空（śūnyatā）——『中論』（2世紀頃）は、すべての存在が自性（独立の本質）を欠くことを論証する。空は虚無ではなく、独立の実体を持たないという規定上の特徴として位置づけられ、本系譜の中で本論文の虚次元と最も広く構造を共有する。

唯識（Yogācāra）の阿頼耶識（ālaya-vijñāna）——世親らの心識八識説における最深層の識として、あらゆる現象の種子（bīja）を蓄える基層意識として規定される。ここに本系譜の中で最も重要な区別がある。本論文の枠組みから見ると、阿頼耶識は現象のあらゆる情報を保持・流通させる情報空間として実次元の深層に属する。一方、本論文の虚次元は情報以前・意味以前の構造的余剰であり、情報を保有する層ではない。両者は「情報空間（実次元深層）」と「情報以前の構造的余剰（虚次元）」という根本的に異なる層に属し、混同されてはならない。

空海の言語存在論——『声字実相義』（9世紀初頭）は、言語（声・字）が記述の媒体ではなく実在（実相）の構造そのものを構成すると説く。本論文の虚次元とは、表層への分節を要請する未分節層と、その層への直接的アクセス不可能性において並行する。

西田幾多郎の場所の論理——『善の研究』（1911）の純粹経験は主客分離以前の直接経験として、後期の場所の論理は絶対無の場所として、存在者を成立させる「場所」が場所自身としては対象化されえないことを示す。本論文の

虚次元とは、対象化に先立つ構造とその対象化不可能性において並行する。ただし西田の場所が意識の構造として展開されるのに対し、本論文の虚次元は対象Xの構造である。

井筒俊彦の言語アラヤ識論（『意識と本質』1983、『意味の深みへ』1985）は、唯識と空海を統合しつつ「意味以前の意味」の層を要請する言語存在論であり、先行層の記述不可能性と表層からの構造的要請において、本論文の虚次元に近接する東洋系参照点である。

周辺系譜として、老子・荘子の無為および道、禅の不立文字・教外別伝、華嚴の事事無礙法界等が、いずれもこの東洋的伝統に属する。

7.9 分析哲学系の余剰——内在的内容としての剰余

大陸系・東洋系と並んで、20世紀英米系の分析哲学にも、形式的・構造的記述が実在の一部を取り残すという系譜がある。クオリア論証（Jackson, 1982）は物理的・機能的記述が完全でも感じられた質は取り残されると論じ、構造実在論へのNewman問題（Newman, 1928; Demopoulos & Friedman, 1985）は構造の記述だけでは対象の内在的内容が一意に定まらないことを示す。ラッセルの一元論（Russell, 1927; Stoljar, 2006; Chalmers, 2010）は、物理学が記述するのは構造的・関係の性質に限られ、その構造を満たす内在的・範疇的性質は記述の外にとどまると論じ、中性一元論（Russell, 1921）は心とも物ともつかない中性的基体を両者の手前に指定する。

これら分析系の余剰は「形式的記述が実在の一部を必ず取り残す」という方向を共有するが、取り残されるものが何であるかにおいて本論文の虚次元と決定的に異なる。分析系が指すのは、構造を満たしている当の内在的・範疇的内容——静的にそこに在りながら構造記述には現れない層である。これに対し本論文の虚次元は、内容ではなく発生にかかわる。取り残されるのは「何が構造を満たしているか」ではなく「その分節がいかんして立ち上がってきたか」であり、前者が構造と内容のあいだの静的なギャップであるのに対し、本論文が照準するのは記述と立ち上がりのあいだの発生的なギャップ——記述がそのつど取り逃す立ち上がりそのものの位置——である。この内容／発生の区別の論証的展開は『実数主義の極北』（村主, 2026d, §4.5）にあり、本節はそれを系譜整理の座標として用いる。

7.10 指標性の剰余——PerryとMellorの帰結

分析系の余剰には、前項の系譜と別に、もう一つの鉅脈がある——本質的指標詞をめぐる議論である。Perry（1979）は、指標的な「私」「いま」「ここ」が、いかなる非指標的記述——日付、座標、固有名——によっても汲み尽くされないことを示した。第五論文はこの剰余が時間構造上に現れる場面を精密化した——Mellor（1998）のトークン反射の説明は「いま」を含む文の真理条件を与えるが、現在の層構造は与えない。真理条件へ還元し終えたとき、取り残されているのは、諸位相がそのうえで深淺の位置を占める、内的に分節された層そのものである（村主, 2026e, §05）。

この鉅脈が系譜整理上重要なのは、そこで取り残される剰余の性格である。クオリア・ラッセルの一元論の剰余が内容の剰余——構造を満たしながら構造記述に現れない静的な基体——であったのに対し、指標性の剰余は内容ではない。「いま」は基体でも性質でもなく、立ち上がりの現場を標識する——それは記述の網羅からそのつど逃れる発生の側の剰余であり、2026d §4.5 が立てた内容／発生の二分において、本稿が確認した範囲では、発生側に整理する分析系唯一の事例である。しかも第五論文の論証は、この剰余が単なる標識では足りず一本の軸を要請することまでを示した——指標性の剰余は、分析哲学の内部から、最小拡張の要請にまで到達していた鉅脈である。第四論文が受動的綜合・規則遵守・偶発性という由来を異にする三つの探究の独立な収束を非閉鎖性の徴とした（村主, 2026d, §4.4）のに対し、これはその収束に第四の証言を加える——しかも時間の分析形而上学からの証言である。

同じ分析形而上学の内部に、帰属先を異にする対照項がある。第五論文が参照したFineの断片主義（Fine, 2005）は、位相の共存という同一の現象に対し、実在そのものの断片化として応答する——共存は実在の側の構造である、

と。本稿の構造的回避はこれと正反対の側に立ち、共存を記述の側の事態として扱って、実在についての主張を留保する (§3.3)。同一の現象を前にして不可記述性をどこに帰属させるかが、両者を分ける。

08 虚次元の五重読解と本論文の立場

§07の系譜的整理を踏まえ、本節では虚次元の三項定義（非意味・非顕在・非定義）を座標に、既存概念がそれぞれ虚次元のどの側面を捉え、どの側面を取り逃すかを明らかにする。順序が重要である——既存概念を起点に虚次元を分類するのではなく、三項定義を起点に既存概念を測る。

8.1 虚次元の三項定義

第一論文§1.2によれば、虚次元は次の三項定義によって規定される。(a) 非意味 (pre-meaningful) ——意味として立ち上がる以前の状態。(b) 非顕在 (non-manifest) ——実次元において現れる形を取っていない状態。(c) 非定義 (non-defined) ——枠組み内に位置づけられた対象として規定されていない状態。本論文の虚次元はこれら三項のすべてを同時に充足する位置であり、いずれか一項のみを捉える読解は虚次元の規定上の位置を取り逃す。なお、ここで「非意味」とは無意味 (meaningless) ではなく、意味形成以前 (prior to semantic articulation) を指す。同様に「非顕在」「非定義」も、否定的な「無」ではなく、それぞれ顕在に先立つ層、定義に先立つ層を指す。

8.2 potentialityとして読む虚次元

Aristotelesのdynamisに淵源を持つ「潜在性」の系譜は、虚次元を「まだ立ち上がっていないが、将来立ち上がりうるもの」として読む可能性を提供する。potentialityは虚次元の非顕在性を捉えるが、非意味を取り逃す。potentialityは何らかの方向性を持つ可能態として既に意味づけられている（例：種子は樹木の可能態である）。一方、虚次元は意味形成の方向性そのものを伴わない。potentiality読解は虚次元の三項定義の一項のみを捉える部分的読解である。

8.3 absenceとして読む虚次元

SartreやBlanchotの系譜で展開される「不在」の概念は、虚次元を「在るべきものが在らない」否定的存在様式として読む可能性を提供する。absenceは虚次元の非顕在性を否定的に捉えるが、これは積極的構造の否認である。本論文の虚次元は単なる不在ではなく、積極的な構造残差である。またabsenceは何かの不在として、すでに何かの意味を前提しているため、虚次元の非意味も捉えない。

8.4 différenceとして読む虚次元

Derridaのdifféranceは、虚次元の非意味と非顕在を充足し、非定義も部分的に捉える——五読解の中で虚次元に最も近い。ただし§7.5で論じたとおり、différanceは操作概念であり虚次元は構造的な位置であって、両者は論理的カテゴリーを異にする。

8.5 unconscious reserveとして読む虚次元

Freud・Lacanの精神分析的伝統で展開される「無意識的予備」の概念は、虚次元を「意識の表層には現れないが、主体の内的構造に位置する蓄積」として読む可能性を提供する。unconscious reserveは虚次元の非顕在性を捉えるが、非意味を取り逃す。無意識的予備は、抑圧された意味・置き換えられた意味・欲望として、すでに意味の領域に属する。また、虚次元は主体の内的構造ではなく、対象の構造残差である。両者は応用される枠組みが根本的に異なる。

8.6 transcendental outsideとして読む虚次元

KantのDing an sichの系譜で展開される「超越論的外部」の概念は、虚次元を「認識能力では捉えられないが、認識を成立させる構造を要請するもの」として読む可能性を提供する。transcendental outsideは虚次元の三項定義の多くの側面を捉える。しかし§7.1で論じたとおり、Kantの超越論的外部は認識主体の外部に位置するのに対し、本論文の虚次元は対象自身に内在する。「外部」性が本質的に異なる。

8.7 本論文の虚次元——構造的余剰として

§8.2～8.6の検討が示すとおり、五読解はいずれも三項定義の一部を捉えるにとどまる。三項すべてを同時に充足し、かつ「対象内在性」を保持する読解は、本稿の比較範囲では確認されない。

ここで示されたのは、五読解に対する虚次元の優位ではなく、その位置の区別可能性である——三項定義は本枠組み自身の座標であり、各読解がそのいずれかの項を取り逃すという結果は、虚次元が既存概念のどれとも別の構造的な位置を占めることを示すにとどまる。東洋系 (§7.8) および分析系 (§7.9) の諸概念もまた、それぞれ本論文の虚次元と深く響き合いつつ独自の射程を持つ。

整理すると、本論文における「構造的余剰」としての虚次元は、次の六つの規定の組み合わせによって輪郭を持つ——(a) 対象に内在する、(b) 積極的構造である、(c) 意味形成以前である、(d) 記述枠組み内の構造的な位置として規定される、(e) 救済論的・実践論的・人称的含意を伴わない、そして (f) 余剰的承認の対象である——虚次元の承認は装置的拡張ではなく (§5.2)、承認ののちも虚次元は記述内容の側に立ち現れず、ゆえにその承認は再帰する (命題 P1b)。(a)～(e)が「虚次元とは何であるか」を輪郭づけるのに対し、(f)は「虚次元を書き留めるとはいかなる操作であるか」を輪郭づける——存在規定に操作規定が加わることで、座標は完結する。本稿が示すのは優劣ではなく、既存概念群との重なりと差異の記述可能性であり、哲学史上の位置づけ自体は今後の比較研究に委ねられる。

09 考察と限界

9.1 メタレベルの構造——告白から命題へ

本稿には自己言及的構造がある——「虚次元は不可記述である」ということ自体が、虚次元についての実次元側からの操作であり、このメタ記述自身が記述余剰を伴う。かつて本枠組みは、これを理論の外から降りかかる限界として告白する以外になかった。本稿においてそれは、理論が自身について導出する命題——余剰的承認は再帰する (命題 P1b)——の、本稿自身への適用になる (§5.3の系2)。限界の告白は、こうして理論の内部に回収された——ただし、回収したという本文が新たな残余を産むことまで含めて。

9.2 未解決問題

本稿に固有の未解決問題として、次が残される。(a) 虚次元の三項定義 (非意味・非顕在・非定義) の各項の相互関係の精密化。(b) 部分的にのみ記述可能な軸——二形態の混成 (§5.2)——の、具体的事例における分解の精密化。(c) 定義Cの前件 (順序に還元されない共属) が実時間軸以外の体系で成立するか否かの、体系ごとの各論。(d) 虚数単位の代数的性質 ($i^2 = -1$ が定める回転) が位相間移行の形式化に働かうかという、第五論文の残した課題。応用領域における経験的接続は本稿の射程外である。

10 結論

世界を記述しようとする営みは、いずれある時点で「ここから先は直接記述できない」という壁に出会う。多くの場合、思考はそこで二通りに終わる——壁の前で止まるか、神秘的なものへと逃げるか。どちらを選んでも記述は終わる。本シリーズが六論文を通じて実演してきたのは第三の道——壁を「記述の構造的余剰」として位置づけ直し、

記述の外側ではなく記述を成立させる側として組み込むことで、壁を抱えたまま記述を続ける道——である。本稿はこの道を、はじめて一つの理論として整備した。

本稿の帰結は、冒頭に掲げた統括命題に回収される——記述体系は、自らが閉じないことにおいてのみ、自らを超えて拡張されうる。そして、その拡張が完結するか再帰するかは、要請された残余それ自体が記述可能になるか否かで決まる。前半は第五論文の定義2および原理1の帰結であり、後半が本稿の寄与である。すなわち、最小拡張は導入される軸の記述可能性を基準に装置的拡張と余剰的承認とに分かれ（定義B）、前者のみが体系を閉じさせうるのに対し、後者は必然的に再帰する（命題P1）。シリーズがこれまで個別に実演してきた三つの操作——虚数単位 i の増設、虚時間 it の要請、虚次元 iD の承認——は、この単一の分類のもとに統合され、先行五論文の自己制限の累積（§04）は、この理論の実践的実装として再記述された。構造的同時性（定義C）は、この理論の系として、独立の理論構築を要さずに与えられた。

本稿の発見を一文に圧縮すれば、こうである——数学の拡張が一度で完結し、存在の記述が終わりなく続くのは、記述する側の能力の差ではなく、要請された残余が記述可能になるか否かの差である。そして残余とは、記述が取りこぼしたものの名ではなく、記述体系がそれを介してのみ自らを超えうる、当の構造的位置の名である。「残余の存在論」という題が指すのは、この位置である。

* * *

実数体は、代数的に閉じないという一つの事態に出会い、一本の軸を足して、閉じた。存在の記述は、閉じないという同型の事態に、書くたびに出会いなおす。代数がただ一度行って完結した操作を、存在の記述は終わりなく続ける——その終わりのなさは欠陥ではなく、記述という営みが実在の立ち上がりに対して持つ、正確な距離の名である。残余の存在論とは、この距離を構造として記述しつづける学の名にほかならない。

註 / Notes

- 1 なお、本節が境界から導いたのは残余の三つの機能であって、その残余が本論文の三項定義（非意味・非顕在・非定義）を満たす虚次元という特定の内容を持つことではない。機能の導出と内容の規定は別の事柄であり、後者は先行論文が構成的に確立した。本節はその内容規定を前提としている。
- 2 定義Aの適用可能性は本シリーズの三事例に限られない。構造的類比として、Hart (1961) の open texture を伴う成文法体系が挙げられる。規則の列挙によって適用のすべてを事前に確定できない法体系は、信義則・公序良俗といった一般条項——列挙に還元されない独立の記述軸——によってその非閉鎖性に応答する。ただし、この類比が定義Bのいずれの形態に属するか、およびその前件が厳密に成立するかの検討は、本稿の射程外とする。
- 3 「定理」ではなく「命題」と呼ぶのは、以下が形式体系内で証明される数学的定理でも論理学の定理でもなく、定義A・Bからメタ理論的に従う哲学的命題だからである——論証の強さを超える名を与えることは、それ自体が規範1の精神への抵触となる。

参考文献 / References

- 村主悠真 (2026a). 拡張虚数理論：存在の二重構造としての $Z = D + iD$. Zenodo. DOI: 10.5281/zenodo.20095255.
- 村主悠真 (2026b). 起こりの構造論. Zenodo. DOI: 10.5281/zenodo.20254107.
- 村主悠真 (2026c). 透 / Tōh: Undistorted Mediation, the Culmination of Prayer. Zenodo. DOI: 10.5281/zenodo.20509278.
- 村主悠真 (2026d). 実数主義の極北——還元的物理主義の果てに. Zenodo. DOI: 10.5281/zenodo.20676271.
- 村主悠真 (2026e). 虚時間——記述の非閉鎖性と最小拡張原理. Zenodo. DOI: 10.5281/zenodo.21185463.
- Aristoteles (4th c. BCE/1984). *Metaphysics*. In J. Barnes (ed.), *The Complete Works of Aristotle*. Princeton University Press.
- Kant, I. (1781/1998). *Critique of Pure Reason*. Cambridge University Press.
- Wittgenstein, L. (1922/1961). *Tractatus Logico-Philosophicus*. Routledge & Kegan Paul.

- Heidegger, M. (1936–1938/1989). *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)*. Klostermann.
- Freud, S. (1915/1957). “The Unconscious.” In *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. 14. Hogarth Press.
- Lacan, J. (1966/2006). *Écrits*. W. W. Norton.
- Derrida, J. (1972/1982). “Différance.” In *Margins of Philosophy*. University of Chicago Press.
- Deleuze, G. (1968/1994). *Difference and Repetition*. Columbia University Press.
- Blanchot, M. (1969/1993). *The Infinite Conversation*. University of Minnesota Press.
- Agamben, G. (2000/2005). *The Time That Remains*. Stanford University Press.
- Fine, K. (2005). “Tense and Reality.” In *Modality and Tense: Philosophical Papers*. Oxford: Oxford University Press.
- Jackson, F. (1982). “Epiphenomenal Qualia.” *Philosophical Quarterly* 32: 127–136.
- Mellor, D. H. (1998). *Real Time II*. London: Routledge.
- Newman, M. H. A. (1928). “Mr. Russell’s ‘Causal Theory of Perception’.” *Mind* 37: 137–148.
- Demopoulos, W. & Friedman, M. (1985). “Bertrand Russell’s *The Analysis of Matter*: Its Historical Context and Contemporary Interest.” *Philosophy of Science* 52: 621–639.
- Perry, J. (1979). “The Problem of the Essential Indexical.” *Noûs* 13(1): 3–21.
- Russell, B. (1921). *The Analysis of Mind*. London: Allen & Unwin.
- Russell, B. (1927). *The Analysis of Matter*. London: Kegan Paul.
- Stoljar, D. (2006). *Ignorance and Imagination*. Oxford: Oxford University Press.
- Chalmers, D. (2010). *The Character of Consciousness*. Oxford: Oxford University Press.
- Hart, H. L. A. (1961). *The Concept of Law*. Oxford: Clarendon Press.
- Gödel, K. (1931/1992). *On Formally Undecidable Propositions of Principia Mathematica*. Dover.
- Saussure, F. de (1916/2011). *Course in General Linguistics*. Columbia University Press.
- Dionysius the Areopagite (5th c./1987). *The Mystical Theology*. Paulist Press.
- Eckhart, M. (13–14th c./1981). *The Essential Sermons, Commentaries, Treatises, and Defense*. Paulist Press.
- Cusanus, N. (1440/1981). *On Learned Ignorance*. The Arthur J. Banning Press.
- Sartre, J.-P. (1943/1956). *Being and Nothingness*. Philosophical Library.
- 龍樹 (2世紀頃/1984). 『中論』 三枝充恵訳. レグルス文庫.
- 世親 (4世紀頃/2005). 『世親論集』 長尾雅人ほか訳. 中公文庫.
- 空海 (9世紀初頭/1983). 『声字実相義』 『弘法大師空海全集第二巻』 筑摩書房.
- 西田幾多郎 (1911/1990). 『善の研究』 岩波文庫.
- 西田幾多郎 (1932/1965). 『無の自覚的限定』 『西田幾多郎全集第六巻』 岩波書店.
- 井筒俊彦 (1983). 『意識と本質』 岩波書店.
- 井筒俊彦 (1985). 『意味の深みへ』 岩波書店.